

国立国語研究所学術情報リポジトリ

漢字の到達度、定着度から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島村, 直己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002877

<報告1>

漢字の到達度、定着度から

所員 島村直己

1. はじめに

国立国語研究所言語教育研究部では、昭和57年度～昭和60年度まで、常用漢字（「常用漢字表」に記載されている漢字）の一字一字について、児童・生徒の読みと書きの習得程度を調査した。

この漢字の習得度調査は、次の下位調査に分かれている。

(1) 到達度調査

小1～小6 配当漢字について、それぞれ学校での学習の終了時点で、音訓別読み書き調査を行うもの。

(2) 定着度調査

小1～小6 配当漢字について、それぞれの配当学年を基準として、その1年前、1年後、2年後、4年後の学年の児童・生徒を対象にして音訓別読み書き調査を行うもの。また、小学校配当漢字以外の常用漢字のうち、児童・生徒にとって、比較的親しみやすいと思われる約300字についても、これにほぼ従って、小5、小6、高1を対象にして音訓別読み書き調査を行うもの。

(3) 習得量調査

中1、高1各10名を対象にして、常用漢字全数の読みの調査を行うもの。

(1)、(2)、(3)とも、調査地域は東京都であるが、(1)の到達度調査では、地域による違いを見るために、一部、秋田県、奈良県でも調査を行った。

2. 習得のレベル

この漢字の習得度調査では、ペーパーテストにより、そして原則として調査学級の学級担任を調査者として、調査を行った。（「漢字の習得度調査－中間報告(3)－」〔以下、「中間報告3」と略す。〕の8、9ページに、実際に用いた調査用紙の例を載せてある。）この方法によって、一字一字の漢字の個々の音訓について、調査対象とした児童・生徒のうち何パーセントの者が読めるか、また書けるか、ということについて調査したわけである。

さて、ある児童・生徒が、ある漢字の読み、または書きを習得したかどうか、ということについては、次の二つのレベルに分けて考える必要がある。¹⁾

①文字のレベル

ある漢字のどの読み方（音訓）でもよいから、その漢字を読めるかどうか、また書けるかどうか、ということ。

②音訓のレベル

ある漢字の個々の読み方（音訓）のそれぞれについて、読めるかどうか、また書けるかどうか、ということ。

この漢字の習得度調査では、個々の漢字の読み、書きについて、音訓のレベルの習得程度を調査した。²⁾ 結果として、「中間報告3」に示すような、音訓別の正答率一覧表ができたわけである。したがって、文字のレベルの習得程度を直接に調査したわけではない。そこで、ある漢字の文字のレベルの習得程度（習得率）というものを、読み書きそれぞれについて、またそれぞれの場合において、その漢字の音訓の中のもっとも高い正答率で代用することにする。³⁾（実際に文字のレベルの習得程度を調べるためには、一字一字の漢字について、一人一人の児童・生徒がその漢字のどの音訓でもよいから読めるか、または書けるか、ということ調べる必要がある。そのようなことを行わないで、上のような操作を行うことは、どの児童・生徒も、この調査でのもっとも正答率の高い音訓から、それぞれの漢字の読み、書きを習得する、と仮定していることになる。）

注1) 最近行われた漢字の読み書き調査は、本調査と同じく、音訓のレベルの習得程度を調べたものが多い。例えば、次のようなものがある。

- ・文化庁「児童・生徒の読み書きの力—当用漢字について—」昭和47年。
- ・総合初等教育研究所「小学生の漢字の力」昭和57年。

文字のレベルの習得程度を調べたものに、やや古いものであるが、次のようなものがある。

- ・文部省「児童生徒の漢字を書く能力とその基準」昭和27年。
「必要に応じて、問題に音で出ている字は、訓を示し、訓で出ている字は音を示し、そのほか、用例を示して、考え違えて別な字を書くものがないようにした。」（同上書9ページ）とあるように、書きの、文字のレベルの習得程度を調査している。
- ・文部省「中学生高校生の漢字を読む力」昭和34年。
漢字を一字一字提出して、読みと用例を記入させ、読みがあっていれば、正答とみなして、読みの、文字のレベルの習得程度を調査している。

注2) 到達度調査と定着度調査についてはそうであるが、習得量調査では一字一字の漢字について文字のレベルの習得程度を調べている。

注3) 「一」と「右」を例にして、もう少し、具体的に説明する。

漢 字	音 訓	到達度 読 み	到達度 書 き	定 着 度 読 み			
				1 年 前	1 年 後	2 年 後	4 年 後
一	イチ	<u>97.0</u>	<u>92.0</u>		<u>96.2</u>	<u>96.9</u>	97.6
	イツ	2.0	9.0		1.9	5.9	48.5
	ひと	71.0	38.0		87.7	93.2	<u>98.2</u>
	ひとつ	82.0	74.0		90.1	92.5	95.2
右	ウ	2.0	2.0		4.4	12.0	51.8
	ユウ	20.5	22.0		40.1	79.1	95.2
	みぎ	<u>89.0</u>	<u>92.0</u>		<u>91.9</u>	<u>96.3</u>	<u>96.4</u>

到達度の読み、書き、定着度読みの（1年前、）1年後、2年後、4年後のそれぞれの場合で、下線を引いた音訓の値が、「一」と「右」それぞれの、文字のレベルの習得程度（習得率）を表すと考える。

3. 結果

(1) 概観

ここでは、平均習得率によって、小学校配当漢字が児童・生徒によってどの程度習得されているか、ということについて概観する。

表1は、到達度調査の読みの場合と書きの場合について、そして、定着度調査の読みに関しては、配当学年の1年前、1年後、2年後、4年後の学年の場合について、平均習得率とSDをまとめたものである。また、図1に、平均習得率をグラフに表した。

- ①到達度について見ると、読みでは、どの学年の配当字でも、90パーセント以上の平均習得率となっている。しかし、書きでは、学年ごとの平均習得率は、57.8パーセントから88.4パーセントというように、読みに比べると低く、また学年間での平均習得率のバラツキが大きい。
- ②読みについて、到達度の場合を基準にして、定着度の1年後、2年後、4年後の場合を見ると、どの学年の配当字でも、平均習得率は高くなっていく。そして、4年後の場合では、どの学年の配当字でも、98、99パーセントの平均習得率となって、上限の100パーセントにほぼ等しくなっている。
- ③到達度の読み、書きの場合、そして定着度読みの1年後、2年後、4年後の場合、小1、小2、・・・小6と上の学年の配当字になるに従って、平均習得率が低くなる傾向がある。¹⁾特に、この傾向は、到達度の書きの場合において著しい。

④定着度読みの1年前の場合を見ると、上と反対に、小2、小3、・・・小6と上の学年の配当字になるに従って、各学年の配当字の平均習得率が高くなる傾向がある。(なお、今回の報告では、1年前の場合については、これ以上ふれない。)

表1：平均、SD

()内SD

	到達度		定着度読み			
	読み	書き	1年前	1年後	2年後	4年後
小1配当漢字 (76字)	93.5 (5.5)	88.4 (8.5)	— (—)	96.0 (3.8)	97.8 (2.0)	99.3 (0.8)
小2配当漢字 (145字)	94.9 (4.1)	75.9 (12.5)	19.4 (10.3)	96.4 (2.7)	97.6 (2.0)	99.2 (0.8)
小3配当漢字 (195字)	93.2 (5.9)	67.3 (14.8)	35.4 (18.1)	94.5 (5.2)	96.9 (3.4)	98.8 (1.7)
小4配当漢字 (195字)	93.3 (5.5)	64.6 (14.1)	43.3 (20.4)	92.8 (5.9)	96.9 (3.3)	98.6 (1.6)
小5配当漢字 (195字)	90.6 (7.3)	57.8 (15.5)	49.4 (22.4)	91.6 (7.3)	95.4 (5.0)	98.0 (2.8)
小6配当漢字 (190字)	92.0 (10.8)	60.4 (18.4)	63.6 (27.5)	92.1 (12.2)	94.4 (11.5)	98.1 (7.1)

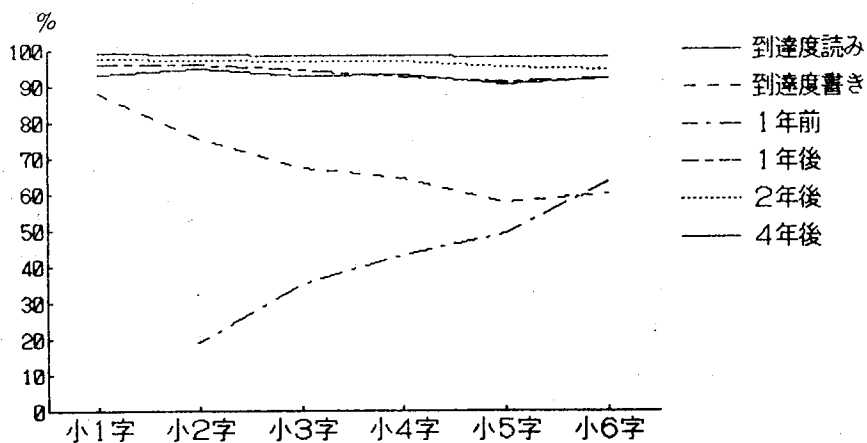


図1：平均習得率

注1) ただし、小5の配当字よりも、小6の配当字のほうが、平均習得率が高い傾向がある。これは、いわゆる「備考漢字」(「小学校学習指導要領」昭和43年改訂版の「学年別漢字配当表」に「備考」として付け加えられた漢字115字のこと。現行の昭和52年改訂版では、小6配当字に組み入れ

られた。)に影響されたためである。参考までに、小6配当字190字を、「備考漢字」115字と「その他」75字にわけて、それぞれの場合での平均正答率を一覧する。

	到達度		定着度読み			
	読み	書き	1年前	1年後	2年後	4年後
備考漢字	96.5	66.8	78.2	96.8	98.3	99.6
その他	85.2	50.7	41.3	85.0	88.4	95.7

「備考漢字」のほかに、昭和52年改訂版になって、配当学年が繰り下げられた漢字がある。付録資料に、これらについての集計表を載せたが、今回の報告では、これらについての分析はこれ以上行わない。

(2) 到達度

ここでは、到達度の読みと書きについて、もう少し詳しく見ることにする。

①図2は、読みの習得率の相対度数分布(度数÷全度数×100の分布)をグラフに表したものである。(配当学年別の度数分布表については、付録資料を参照されたい。)

どの学年の配当字も、90.0~100.0パーセントの区間に集中している。また、小1、小2、・・・小6と上の学年の配当字になるに従って、平均正答率が若干低くなる傾向があるものの、それほど差がないため、相対度数分布はほとんど同じ曲線を描いている。(ただし、小5配当字は、ほかと比べると、やや特異な曲線を描いている。)

②図3は、同じように、書きの習得率の相対度数分布(度数÷全度数×100の分布)をグラフに表したものである。(配当学年別の度数分布表については、付録資料を参照されたい。)

読みの場合と異なり、小1、小2、・・・小6と上の学年の配当字ほど分布が全体的に左(小さい方)に寄っている傾向が認められる。これは、小1、小2、・・・小6と上の学年の配当字ほど平均習得率が低くなっていく傾向があることに対応している。

③図4は、一字一字の漢字について、読みの場合の習得率と書きの場合の習得率の差を計算して、各学年の配当字別に、その差の相対度数分布(度数÷全度数×100の分布)をグラフに表したものである。(「書きの習得率-読みの習得率」の式で計算した。したがって、その値が正であるならば、読みの場合よりも書きの場合のほうが習得率が高い漢字であるということになり、反対にその値が負であるならば、書きの場合よりも読みの場合のほうが習得率が高い漢字であるということになる。)

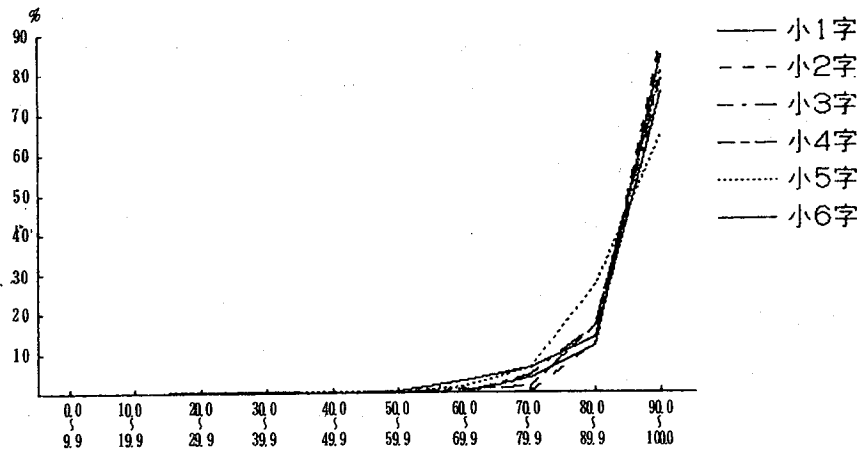


図 2 : 相対度数分布—到達度読み—

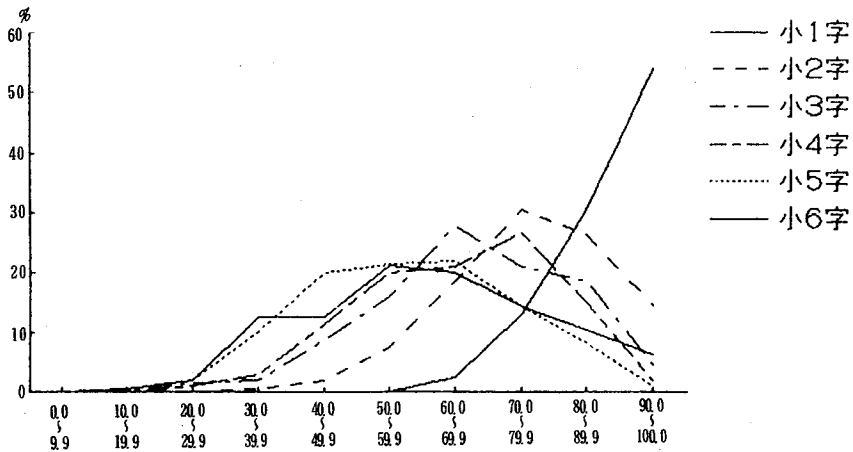


図 3 : 相対度数分布—到達度書き—

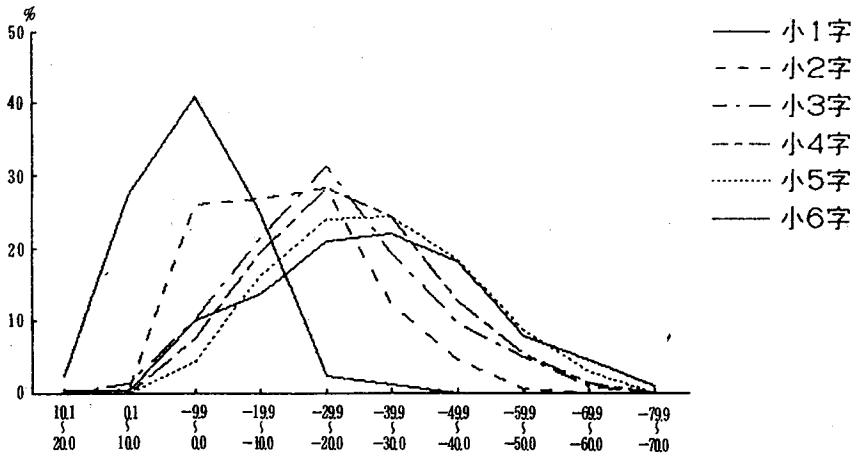


図 4 : 読みと書きの差

読みの場合よりも書きの場合のほうが、習得率が高い漢字がある。次に、一覧する。(5パーセント以上書きの習得程度のほうが良い漢字には、下線を引いた。)

・林 九 水 夕 山 男 上 人 土 車 右 女 月 空 左 口
日 犬 三 四 下 川 土 (1年配当字)

・考 (2年配当字)

・油 転 育 (3年配当字)

・是 勸 (6年配当字)

しかし、全般的には、小1、小2、・・・小6と上の学年の配当字になるに従って、読みの習得率に比べて、書きの習得率の落ち込みの大きい漢字が多くなる、と言えよう

(3) 定着度

ここでは、一字一字の漢字について、到達度、1年後、2年後、4年後のそれぞれの場合の習得程度を通覧する。特に、一字一字の漢字について、児童・生徒が現在の配当学年で学習するのが適当であるかどうか、という面から見る

ある漢字が現在の配当学年で適切であるかどうかということ判定する絶対的な基準は存在しない。一つの方法として、基準習得率とでもいうようなものを設けて、その基準習得率に達していない漢字は、現在の配当学年で児童・生徒が学習するのに不適当な漢字である、と判定する方法がある。しかし、この方法には、次のような弱点がある。

- ①基準習得率を何パーセントに決めるべきなのか、はっきりとした根拠を述べてそのことを決めることは困難である。
- ②小1、小2、・・・小6と上の学年の配当字ほど、平均習得率が低くなる傾向があった。特に、書きの場合、このことは顕著であった。この理由がはっきりと分からないのに、どの学年の配当字についても、同じ基準習得率を設けるのには問題がある。
- ③このような方法では、一字一字の漢字について、基準習得率に達しているか、それとも達していないか、という情報しか得られない。しかも、往々にして、達していないことに重点が置かれる。

もっとも、このような弱点があるとはいえ、それぞれの漢字について何パーセントの児童・生徒が読むことができたか、あるいは書くことができたか、という見点は重要である。(付録資料に、到達度の読みと書きの場合について、10パーセント刻みではあるが、習得率順に漢字を一覧する。)しかし、ここでは、次のような、これとは異なる基準を設けて考えてみることにする。すなわち、

「習得率が高すぎたり、あるいは反対に低すぎたりする漢字は、どちらにせよその配当学年に適合しない漢字である。」

という基準である。操作的に、

平均習得率+1SDより高い習得率の漢字 → 習得率の高い漢字

平均習得率±1SD以内の習得率の漢字 → 習得率の標準的な漢字

平均習得率-1SDより低い習得率の漢字 → 習得率の低い漢字

とする。¹⁾そして、到達度、1年後、2年後、4年後の場合を通覧して吟味することにする。便宜的に、記号で、

平均習得率+1SDより高い習得率の漢字 → +

平均習得率±1SD以内の習得率の漢字 → 0

平均習得率-1SDより低い習得率の漢字 → -

と表す。一字一字の漢字について、読み、書きそれぞれの場合について、到達度、1年後、2年後、4年後の順にこの記号を付ける。(そうすると、実際とは異なるが、例えば、「山+-0+」のように付くわけである。)

なお、定着度の書きについては、小1、小2、小3各配当字に関してはすでに集計を済ませている。(「漢字の習得度調査-中間報告(2)-」1985年3月に報告した。)それらについては、読みの場合と同じ手順で文字のレベルの習得率を求めた。小4、小5、小6各配当字に関しては、今年度中に集計作業は完了する予定ではあるが、現在なお集計作業中であるため、個々の漢字について到達度の書きの場合でいちばん正答率の高い音訓について20人分抽出して集計して、それを仮にそれぞれの場合での文字のレベルの習得率としてみた。試みに、そのようにして、ここでは、読みと書きについて分析してみる。(であるから、ここでの小4、小5、小6各配当字の書きについての分析は、今後の見通しを得る程度のものであることに留意されたい。)

①読みでは、+と-がともに付く漢字はないが、書きでは、若干(996字中11字)ある。しかし、ある学年では習得率が高く、別のある学年では反対に習得率が低い、というような漢字はほとんどない、すなわち、どれか一つの学年で習得率が高いか低いかわれば、別の学年で、その反対のことになることはほとんどない、とすることができよう。

②到達度、1年後、2年後、4年後の四つの場合に、それぞれ、+、0、-の三つのうち一つ付くわけである。(単純に+0-の組合せを計算すると、それぞれ $3^4=81$ の組合せができるわけであるが、実際に現れた組合せは、読みの場合で21通り、書きの場合で39通り)基準を少しゆるめて、+が三つ以上、または-が三つ以上付いた漢字を、次に一覧する。(ただし、読みの、特に2年後、4年後の場合には、平均+1SDの値が上限の100を越えて、+が付かないことが多い。そこで、読みの+の付いた漢字に関して

のみ、+が二つ以上付いた漢字を一覧することにする。)

【読みで+が二つ以上付いた漢字】(24字)

- ・名(1年配当字:1字)
- ・数 当(2年配当字:2字)
- ・愛 漢 紀 機 菜 史 初 賞 焼 隊 熱 飛
(4年配当字:12字)
- ・液 賀 券 故 妻 常 特 燃 弁(5年配当字:9字)

【書きで+が三つ以上付いた漢字】(104字)

- ・三 土(1年配当字:2字)
- ・会 外 玉 元 語 広 光 行 高 国 寺 自 時 色 心 西
太 体 長 東 父 米(2年配当字:22字)
- ・育 界 岩 君 兄 言 公 事 所 世 全 内 肉 畑 品 物
万 面 由 葉 和(3年配当字:21字)
- ・位 委 央 器 給 史 宿 静 倍 変 法 練
(4年配当字:12字)
- ・因 永 果 賀 基 句 個 状 性 政 舌 絶 素 特 非 仏
弁 保 豊 無 迷 容(5年配当字:22字)
- ・羽 映 可 割 机 弓 穴 源 呼 好 骨 砂 私 若 城 針
洗 仲 乳 背 班 宝 亡 忘 枚(6年配当字:25字)

【読みで-が三つ以上付いた漢字】(84字)

- ・下 学 左 十 正 千 林(1年配当字:7字)
- ・戸 考 谷 市 弱 刀 麦 用 曜 来 里(2年配当字:11字)
- ・員 開 崖 宮 去 湖 幸 持 主 捨 章 待 短 柱 転 皮
表 油(3年配当字:18字)
- ・貨 課 芽 改 喜 挙 共 欠 航 告 刷 唱 臣 勢 包
(4年配当字:15字)
- ・居 興 訓 絹 採 雑 蚕 賛 支 授 除 承 称 設 銭 退
綿 余 預(5年配当字:19字)
- ・壺 我 拡 勸 兼 后 霽 仁 是 俗 著 討 式 陞
(6年配当字:14字)

【書きで-が三つ以上付いた漢字】(105字)

- ・王 学 休 字 早 虫 入 百(1年配当字:8字)
- ・遠 画 汽 帰 黄 紙 切 船 知 茶 昼 当 南 麦 妹 鳴
曜(2年配当字:17字)

- ・院 飲 階 寒 崖 去 輕 庫 祭 取 受 拾 商 勝 身 族
打 待 農 波 氷 放 役 旅 礼 (3年配当字：25字)
- ・貨 課 改 旗 航 刷 孫 貯 腸 停 票 付 末 脈 量
(4年配当字：15字)
- ・衛 飲 旧 許 券 陰 講 採 資 衆 除 称 製 績 善 版
(5年配当字：16字)
- ・壺 革 株 看 勸 劇 兼 敵 后 穀 积 蓋 就 縦 是 俗
討 式 腦 拜 陛 補 棒 覽 (6年配当字：24字)

読みと書きで逆の結果になる漢字は、わずかであるが、「当」(2年配当字)と「券」(5年配当字)の二字あった。「当」、「券」とも、読みで+が二つ付き、そして書きでは反対に-が三つ付いた。

なお、読みと書きで共通する漢字には下線を引いた。

注1) 平均、標準偏差(SD)は、正規分布であるときに最良の尺度となる。つまり、そのとき、平均は、中央値、モードとも等しくなって、分布の代表値としての具体的なイメージが描きやすいものとなる。そして、平均、SDの大きさが異なっても、正規分布であれば、平均±1SDの間に全体の68.3パーセントが含まれ、平均±2SDの間に全体の95.4パーセントが含まれる、というようなことになり、そしてSDを単位に測定した値(標準化点)と順位とが一対一に対応することになる。

図2で見たように、読みの習得率の分布はJ字型分布であり、また、上限が100、下限が0というように、値が固定しているため、平均、SDは、尺度としてやや使いにくい。(例えば、定着度読みの2年後、4年後の場合では、平均+1SDの値は、ほとんどの学年の配当字で100を越えている。)平均±1SDの範囲に含まれる漢字の割合を次に示す。

なお、定着度の書きの場合についても、平均±1SDの範囲に含まれる漢字の割合を同じように示す。

	到達度		定着度読み		
	読み	書き	1年後	2年後	4年後
小1配当字	88.2	67.1	82.9	76.3	84.2
小2配当字	84.1	61.4	77.9	82.1	85.5
小3配当字	79.0	69.2	85.6	89.7	90.3
小4配当字	76.9	65.6	79.5	88.7	80.3
小5配当字	76.9	66.2	79.5	88.2	91.3
小6配当字	88.4	65.3	91.6	92.1	94.7

	定 着 度 書 き		
	1年後	2年後	4年後
小1 配当字	73.7	77.6	88.2
小2 配当字	64.1	66.9	73.1
小3 配当字	67.2	67.7	71.3
小4 配当字	69.2	67.2	80.5
小5 配当字	67.7	59.0	64.1
小6 配当字	60.0	60.5	71.6

(4) 地域差

到達度調査では、一部の漢字（小3配当字と小6配当字）については、東京都ばかりでなく、秋田県、奈良県でも調査を行った。そこで、読みについて、地域差を見てみることにする。（東京都以外の二県は、A県、B県という記号を用いる。）

	小 3 配 当 字			小 6 配 当 字		
	東京都	A 県	B 県	東京都	A 県	B 県
平 均	93.2	95.9	95.0	92.0	93.6	93.8
S D	5.9	5.1	5.4	10.8	10.9	10.2

東京都が、小3配当字、小6配当字とも、三つのうちでもっとも平均習得率が低くなっている。しかし、次の二つのクロス集計表から分かるように、個々の漢字の習得率については、東京都、A県、B県でそれほど変わらないようである。

表2：東京都、A県、B県のクロス集計－小3配当字

	東京	A 県					B 県					
		20 % 未 満	20 % 以 上	40 % 以 上	60 % 以 上	80 % 以 上	20 % 未 満	20 % 以 上	40 % 以 上	60 % 以 上	80 % 以 上	
80%以上	186					186					2	184
60%以上	9				2	7					4	5
40%以上	0											
20%以上	0											
20%未満	0											
計	195	0	0	0	2	193	0	0	0	6	189	

表3：東京都、A県、B県のクロス集計－小6配当字

	東京	A 県					B 県					
		20 % 未 満	20 % 以 上	40 % 以 上	60 % 以 上	80 % 以 上	20 % 未 満	20 % 以 上	40 % 以 上	60 % 以 上	80 % 以 上	
80%以上	169				1	168						169
60%以上	18			2	9	7			1	10	7	
40%以上	1			1					1			
20%以上	2		2					1	1			
20%未満	0											
計	195	0	2	3	10	175	0	1	3	10	176	